

「道順説明」における参照点の言語表現に関する考察

— 談話の初期段階に注目して —

鹿 嶋 恵

1. はじめに

会話の中で道案内を与えたり受けたりするという行為（‘direction-giving’）は、社会的に構造化された組織的な現象であるということが、Psathasを中心とした一連の研究で明らかにされている（Psathas & Kozliff 1976, Psathas 1986a, 1986b, 1991）。彼らの研究によれば、社会的に構造化された当該行為は、文脈を敏感に反映するものであり（context sensitive）、当事者によって引き起こされ、連鎖的に組織化され、当事者の個性（当事者の知識や、想定される知識、表出された理解など）にも応じられるものとされる。その一方で、1つの構造としての当該行為は、文脈から独立し（context-free）、規則的で、繰り返される組織があり、中断や再開の体系的方法のパターン化、あるいは識別可能な開始部や終結部のパターン化を持つ組織があるとされている。そして、このような構造は、多くの道案内や、多くの案内者・受け手達に当てはまると述べられている（Psathas 1991: 214）。

他方、認知言語学の領域では、言語の構造は予め与えられたものではなく、人間の認知的な営みによって規定されてくるという立場をとり、人間が持つ認知イメージに注目する（cf. 池上 1995）。この立場に立てば、いわゆる道案内では、道順を知っている人（説明者）が、道順を知らない人（被説明者）に対して、自分の認知する／している道順のイメージを言語表現化して伝え、相手となる被説明者はこれを受けて、自己の中に新たな道順のイメージを構築していくことになる。すなわちそれは、説明者と被説明者の間における、認知イメージの協同構築のプロセスであり、言語表現を介する相互行為において成り立つ行為と言える。本稿では、このような道順の認知イメージの伝達・構築に関する相互行為を「道順説明」と呼ぶことにする。

ところで、このような「道順説明」には、地図が活用されることも珍しくない。一般的には、地図の利用には、視覚的な補助による理解の促進という効果が期待されよう。しかし、地図の利用は、必ずしも当該行為の遂行を容易にするとは限らない。というのも、地図を用いた場合の「道順説明」は、空間認知のみならず図形認知の問題も絡み合う、より複雑な言語表現行動となるからである。説明者の認知する道順のイメージの伝達は、説明者と被説明者の空間認知や図形認知が一致して初めて可能になるものであり、もしそのいずれか一部でも一致しないならば、達成は難しくなる。すなわち、コミュニケーション・トラブル¹⁾が生じて、当該行為の遂行が妨げられることになる。

これに関して、「道順説明」という課題達成実験を実施した村上（1997）は、日本語母語話者と非母語話者の接触場面において、特徴的なコミュニケーション・トラブルが生じることに注目し、そのトラブルの原因の解明を試みている。そこでは、コミュニケーション・トラブル発生の主要因とし

て、説明者と被説明者の間では、少なくとも3種の認知フレーム²⁾に関する対立（空間の参照フレームに関する対立、地図の図形の認知フレームに関する対立、方向参照地点の認知フレームに関する対立）が生じることが指摘された。

しかしながら、村上の研究では、コミュニケーション・トラブル発生以前の段階では、コミュニケーション・トラブル回避のために、どのようなことが問題となり、どのようなやり取りがなされているか等は検討されていない。

また、村上（1997）では指摘されていなかったものの、上記の対立と呼ばれる状況を詳しく見てみると、「道順説明」の談話におけるやり取りのごく早い段階で、被説明者が道順を間違えるという現象（以下、「初期段階で道順を間違える」現象）が起きている。この現象に着目すれば、コミュニケーション・トラブルの発生以前の段階を解明する糸口がつかめるのではないかと考えた。

そこで、本稿では上記の「初期段階で道順を間違える」現象の要因を探るべく、「道順説明」の談話の初期段階に注目し、参照点に関する言語表現の分析を試みる。具体的には、次の2点を明らかにすることを研究目的とした。

- a) 「初期段階で道順を間違える」という現象の実態。
- b) 母語場面、および接触場面Ⅰ・接触場面Ⅱ（ⅠとⅡの区別については後述）において、日本語母語話者と非母語話者が、説明者／被説明者として「道順説明」のやり取りの中で捉える参照点の位置、およびその言語表現の実態。

2. 談話資料

本稿で分析の対象とした談話資料は、「道順説明」という課題達成実験において収録されたものである（cf. 村上1996, 鹿嶋（村上）, 2000）。この実験は、Blakar（1973）の実験手法と実験材料を一部修正して行われた。

実験内容を簡単に述べる。2人組の被験者ペアが仕切りを挟んで対座する。お互いの顔は見えても、相手の手元や地図は見えない。各々に実験材料の地図が渡される。被験者①に渡された地図①には、道順（「赤の道順」：地点Aから地点Bに至るまでの道順）が記されている（cf. 図1）。しかし、被験者②の地図②には、それが記されていない。被験者①は説明者となり、被験者②（被説明者）に対してその道順を説明すること、そして被験者②（被説明者）はこれを自分の地図上で辿ることが課題とされる³⁾。

被験者は、3種の談話場面（「母語場面」「接触場面Ⅰ」「接触場面Ⅱ」）ごとに10組のペア、計30組（計60名）である（cf. 表1）。各ペアの親疎関係は、Blakar（1973）に準じ、被験者の自己申告による親しい友人同士の間柄とした。非日本語母語話者（上級日本語学習者）の日本語習得レベルについては、日本語能力試験1級合格を条件とした。

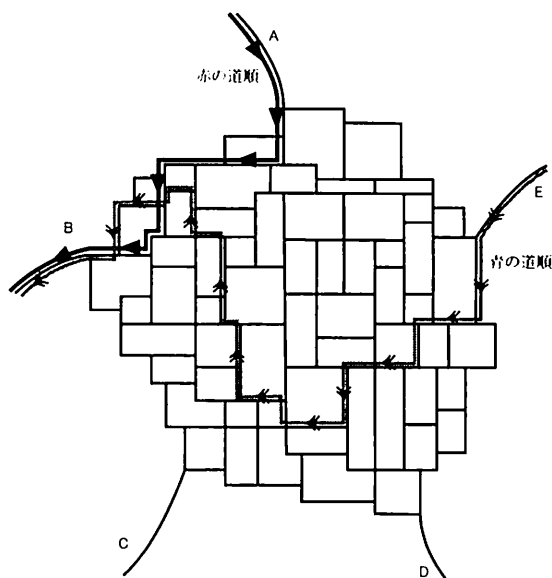


図1 実験材料の地図①

収録された音声談話データは、Du Bois *et al.* (1992, 1993) の手法に基づき、文字化作業を行った。なお、談話データの分析の際には、「道順説明」を受けて被説明者が地図②の上に描き込んだ道順や、実験者の参与観察メモ等も参考にした。

表 1 課題達成実験の被験者の組み合わせ

談話場面	被験者① (説明者)	被験者② (被説明者)
母語場面	日本語母語話者 (NS)	日本語母語話者 (NS)
接触場面 I	非日本語母語話者 (上級日本語学習者) (NNS)	日本語母語話者 (NS)
接触場面 II	日本語母語話者 (NS)	非日本語母語話者 (上級日本語学習者) (NNS)

3. 「初期段階で道順を間違える」という現象

まず具体例から、「初期段階で道順を間違える」という現象を見てみたい。分析の便宜上、図1における「赤の道順」の道筋上の参照点²⁾に、地点(あ)～(そ)の記号を振る (cf. 図2)。

次の例 (1) は、接触場面 II (説明者は母語話者、被説明者は非母語話者) の被験者ペアによる談話データである。説明者が被説明者に対して、地図①に記された「赤の道順」を、矢印に沿って出発点Aから到着点Bまで説明しているところである (以下、[JFNF5R] のような記号は被験者ペアごとのデータ整理番号を示す。「NS」は日本語母語話者、「NNS」は非日本語母語話者、「説」は説明者、「被」は被説明者を示す。また、発話中にある「突き当たり_{地点(う)}」のようなゴシック文字は道筋上の参照点であり、これに添えられた下付文字は図2に記された地点記号を示す。その他の記号については、本稿末の「文字化記号」を参照)。

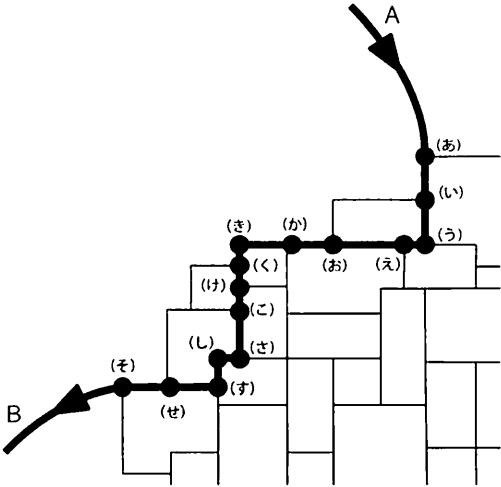


図 2 「赤の道順」の参照点記号
(地図①の該当部分のみを拡大)

(1) [JFNF5R] (接触場面 II)

- 01 NS 説: えっと=@@@
- 02 ...じゃあまず, _
- 03 ...Aを出発して=, \
- 04 NNS被: ..はい, _
- 05 NS 説: ..えっと=, _
- 06 ... (1.3) ず=つと下に行って, \
- 07 NNS被: ...ず=つと下 [に] _
- 08 NS 説: [突き] 当たり_{地点(う)} =, _
- 09 NNS被: ..はい, _

- 10 NS 説: ..突き当たる_{地点(う)}よね? __
 11 NNS 被: ..はい. __
 12 NS 説: ..そこ_{地点(う)}を=, \
 13 ...え=つと左に行って=, \
 14 NNS 被: (0) あ%すいません, __
 15 ..あひだ-
 16 ..左ですね? /
 17 NS 説: ..うん. __
 18 NNS 被: ...(.7)は[い]. __
 19 NS 説: [左]にず=つと行くと, \
 20 NNS 被: ..はい. __
 21 NS 説: ... (1.2) 今度また, __
 22 ..下に-
 23 ..突き当たる_{地点(き)}から=, \
 24 NNS 被: ..はい. __
 ((中略))
 37 NS 説: ..でそのまま, __
 38 ..道なりにず=つと行ってBに出る. __
 39 NNS 被: ...あ-
 40 NS 説: ... (1.0) 出てきた? /
 41 NNS 被: ... (1.7) ずっと下に行って, \
 42 ... (1.5) あれっ? /
 43 NS 説: (0) あれっ? /
 44 NNS 被: ..ちょっと待って[@@@@]
 45 NS 説: [どこにいる]? /
 46 ..待ってもつかい行くよ /
 47 NNS 被: ..はいはい. __

例(1)では、説明者(母語話者)から発話[08,10]で「突き当たり」「突き当たる」と示された地点(う)について、この時点で被説明者(非母語話者)が想定している位置は地点(い)であった。被説明者はこの時点で「左ですね?」(発話[14-16])と方向に関する確認を行っているものの、地点(い)と地点(う)の進行可能方向が同じであったため、説明者は「うん」(発話[17])と受け入れてしまう。そこが食い違ったまま、説明者・被説明者間での「道順説明」は進行していくが、発話[42-43]に至ってようやく、両者がコミュニケーション・トラブルに陥っていることが明らかになっている。

次の例(2)は、接触場面Ⅰ(説明者は非母語話者、被説明者は母語話者)の被験者ペアの談話データである。

(2) [NMJM1R] (接触場面 I)

((前段略))

- 01 NNS 説 : あのまず, __
 02 ..A が, __
 03 ..A から出発して=, __
 04 NS 被 : ..はい. \
- 05 NNS 説 : ..あの=, __
 06 ..まず, \
- 07 ..コウサツ道路_{地点(い)}がある%ありますよね? /
 08 ..コウサツ点_{地点(い)}があつて, __
- 09 NS 被 : ..交差点が, __
- 10 NNS 説 : ..だい%い%第 1 コの交差点_{地点(い)}がありますよね? /
 11 ...その交差点_{地点(い)}が=, __
- 12 NS 被 : ..うん. \
- 13 NNS 説 : ..あの=, __
 14 ...(.9) 12 時方向の方へ, __
- 15 NS 被 : ...<@ 12 時の方向? @> /
- 16 NNS 説 : ..うん. \
- 17 ...12 時, __
 18 ..の方向へ, \
- 19 ..まっすぐ行って, __
- 20 NS 被 : ..うん. \
- 21 NNS 説 : ...ひとつのコウ%交差点_{地点(い)}を通過して, \
- 22 NS 被 : ..うん. \
- 23 NNS 説 : 第 2 番目の交差点_{地点(う)}で止まる. __
 24 ... (2.1) ね? /
- 25 NS 被 : (0) ちょっと待って. /
- 26 ..もう 1 回行くよ. /
- 27 ...え=と A を出発して[=], /
- 28 NNS 説 : [し]て=まず, __
- 29 NS 被 : ..最初にこう=-
- 30 NNS 説 : あの=, __
- 31 (0) まず第%第 1 コあの=, __
- 32 ..交差点_{地点(い)}があるですよね? /
- 33 NS 被 : ..3 つに分かれてる[よね]? /
- 34 NNS 説 : [うん]. \
- 35 NS 被 : ..これ_{地点(あ)}をまっすぐ[い-]
- 36 NNS 説 : [ふ] たつがわかるですね? /

- 37 NS 被: ..ふたつ, __
 38 ..うん[左地点(あ)]と右地点(い)があって, __
 39 NNS 説: [うん]. \
 40 NNS 説: ..うんそ%そういう方向まず 12 テン-
 41 NS 被: ...じゅ[うに-],
 42 NNS 説: [12]時, __
 43 ..12時の方向へまっすぐ行って=, __
 44 NS 被: ..右地点(い)ってことね? /
 45 NNS 説: ... (1.1) え=はい. __
 46 (0) 右地点(う) ですね? /
 47 NS 被: ..あ=左地点(あ)に曲がらないってことね? /
 48 NNS 説: ..そうですね. __
 ((中略))
 128 NNS 説: ..はい. \
 129 ..それで B の-
 130 B のところへ着きます. __
 131 NS 被: (0) ええ @@@@ ?
 132 ... (H) 着かないよ [@@@@]
 133 NNS 説: [着かないの]? /
 134 ..じゃあま-
 135 NS 被: @@@@@@ ちよとも 1 回説明して. /

例 (2) では、説明者は出発点 A から地点 (う) まで道筋を詳しく説明することを試みている。しかしながら、地点 (あ) を無視し、地点 (い) を「第 1 の交差点」、地点 (う) を「第 2 番目の交差点」と捉えていた。これに対して、被説明者は地点 (あ) (い) (う) 各々の詳細な確認を行うが (発話 [29-48]) 説明者と被説明者がそれぞれ想定している地点は噛み合っておらず、かつ両者共にそのことに気づいていない。その後、被説明者が慎重に確認を加えながらやり取りが進んで行くものの、結果的に、発話 [131-133] でコミュニケーション・トラブルに陥っていることが明らかになる。

このように、上記例 (1) と例 (2) では、いずれも説明の「初期段階で道順を間違える」という現象が生じている。そこで、上記のような現象がどのくらい生じているかを、3 種の談話場面ごとに調べてみた。

その結果、母語場面では 1 例⁵⁾、接触場面Ⅰでは 2 例、接触場面Ⅱでは 6 例であった。母語場面と接触場面Ⅰでは、被説明者がいずれも日本語母語話者であることが共通する。これに対し、接触場面Ⅱでは、被説明者が非母語話者であるという違いがある。すなわち、被説明者が母語話者の場合には「初期段階で道順を間違える」現象の発生は少なく、被説明者が非母語話者の場合には、同現象が多発していたという結果が読み取れる。

4. 参照点の言語表現

前節 3. では、「初期段階で道順を間違える」という現象が接触場面Ⅱ（母語話者が説明者、非日本語母語話者が被説明者の談話場面）で多発していることを明らかにした。

そこで、なぜこのような現象が生じるのか、その要因を探るために、説明者と被説明者がそれぞれ、地図上のどの地点を参照点と捉え、それをどのように言語表現化しているのか検討したい。具体的には、出発点Aから地点（え）までの談話部分に焦点を絞り、下記の2点に関する分析を行った。

- 1) 説明者は、地点（あ）～地点（う）を、それぞれどのように言語表現化しているか。
- 2) 被説明者は、説明者による「道順説明」に対して、地点（あ）～地点（う）に関する確認行為を行っているか否か。また、行っているならば、どのような言語表現を用いているか。

以下、まずは母語場面の分析結果を見た上で、接触場面Ⅰと接触場面Ⅱの結果を検討したい。

4.1 母語場面での参照点の言語表現

表2は、日本語母語話者同士による母語場面での参照点の表現化状況をまとめたものである。10組の被験者ペアについて、課題達成時間（出発点から到着点に至るまでの「道順説明」のやり取りで要した時間）が早かった順に上から提示されている。また表中の言語表現は、分かりやすくするため、ポーズや周辺言語などの記号は省略し、複数のイントネーション・ユニットにまたがる表現の場合も意味のまとまりを優先して表示した。

表2 母語場面における参照点の言語表現

被験者 ペア名	課題達成 時間 (分"秒")	説明者による 地点(あ)(い)の 言語表現	説明者による 地点(う)の言語表現	被説明者による 地点(あ)～(う)に関する 確認表現	間違い現象 発生の有無
JMJM1	00'42"	無	「突き当たり」	無	無
JMJM5	00'52"	無	「突き当たってください」	無	無
JFJF2	00'56"	無	「3番目の曲がり角」	無	無
JFJF3	01'15"	無	「T字路」 「もう前に進めないところ」 「左右にしか行けないところ」	「T字路と言うのは＝」 「最初に左に曲がる道があつて」 「次に右に曲がる道があつて」 「行き止まり」	無
JMJM4	01'16"	無	「3つ目の曲がり角」	「突き当たりのところ？」	無
JMJM3	01'28"	「1つ目2つ目の 交差点があつて」	「突き当たるやん」	無	無
JFJF5	01'28"	「いちに＝」	「3つ目の角」 「3つ目」「突き当たり」	「3つ目を左？」	有り
JFJF4	01'36"	「1つ目の三叉路」 「左側に道が出てきますよね？」	「突き当たりますと」	「三叉路なんてないよ」	無
JMJM2	01'43"	「1つほど下がっ」	「突き当たってください」	「(小さいカッコに) 突き当たるん？」	無
JFJF1	01'55"	無	「突き当たる」	無	無

前節3. でも述べた通り、母語場面の被験者ペアでは、「初期段階で道順を間違える」現象が生じているのは1組 ([JFJF5]) のみで、それも地点(う)において、曲がる方向を間違えた例であった。

他方、上記被験者ペア10組のうち5組では、説明者から地点(あ)(い)が言語表現化されていない。特に、課題達成時間が1分を切った上位被験者ペア3組では、地点(あ)(い)が言語表現化されていないだけでなく、被説明者から同地点に関する確認も行われていない。それでもなお、参照点に関するコミュニケーション・トラブルは生じていないのである。

このように、地点(あ)(い)が言語表現化されない例は決して珍しいものではなく、次の例(3)～例(5)のようなやり取りがそれに相当する。

(3) [JMJM1R] (母語場面)

- 01 NS 説 : え=と, __
 02 ..^Aから出発し`て=, /
 03 → ..`突き当たり_{地点(う)}まで行ってください.\
 04 NS 被 : ..はいはい. __
 05 → ..`突き当たり_{地点(う)}行きました.\
 06 NS 説 : ...^で, /
 07 ..それから..あの= --
 08 ... (1.7)^Bの方向`に, /

(4) [JMJM5R] (母語場面)

- 05 NS 説 : ...じゃあ^A=か`ら, /
 06 ..まず, __
 07 ..まっすぐに, __
 08 ..下に, __
 09 ...(.7)`降りて, __
 10 → ^突き当たって_{地点(う)}ください.\
 11 NS 被 : ..はい.\
 12 NS 説 : ...(.7)で, \
 13 → ...`突き当り^の, /
 14 → ...道_{地点(う)}^を, /
 15 ..え=と, __
 16 ..^Bの方角`に, /
 17 NS 被 : ..はい.\

(5) [JFJF2R] (母語場面)

- 34 NS 説 : ...じゃ=, __
 35 ..えっと=, __
 36 ^Aから=, __

- 37 NS 被: ..うん.\
- 38 NS 説: ..まず=, __
- 39 NS 被: ..うん.\
- 40 NS 説: ..え=と, \
- 41 → ^3 番目の=, __
- 42 NS 被: ..うん.\
- 43 → NS 説: ..`曲がり角_{地点(う)}まで来^て=, /
- 44 NS 被: ..うん.\
- 45 NS 説: ..`右にずっと行っ^て=, /

上記例 (3) では、説明者が地点 (う) を「突き当たり」(発話 [03]) と言及し、被説明者もこれを「突き当たり」(発話 [05]) と反復して受け入れている。

また例 (4) では、説明者の発話 [05]「じゃあ^A=から」によって「起点」が示され、発話 [10] では非明示的であるものの、「突き当たってください」の表現により地点 (う) が「着点」として指標されている⁶⁾。発話 [13-14] でも、同地点 (う) が「突き当たりの道」と言及されている。これに対して、被説明者からは、「はい」と返答されているのみで、提示された「道順説明」がそのまま受け入れられている。

例 (5) では、説明者が地点 (う) を「3 番目の曲がり角」(発話 [41, 43]) と言及し、被説明者もこれを「うん」(発話 [44]) と受け入れている。

このように、上記例 (3) ~ 例 (5) では、説明者からは地点 (あ) (い) が言語表現化されておらず、被説明者からも同地点に関する確認も行われていないにも拘わらず、「道順説明」は非常にスムーズに進行していた。このことから、説明者・被説明者の間で参照点の捉え方が、不思議なほど一致していたことが窺える。

他方、出発点 A から地点 (う) に至るまでの道筋に存在する地点 (あ) (い) を、数え上げる形で言及した被験者もあった。次の例 (6) の発話 [10-11] や、(7) の発話 [07-09] および発話 [22] のような例である。

(6) [JMJM3R] (母語場面)

- 01 NS 説: ^ Aからね=, /
- 02 NS 被: ..ああ.\
- 03 NS 説: ..^ Aからずっと=, __
- 04 ..く^だって`行く[よ]. /
- 05 NS 被: [`はい]はいはいはい.\
- 06 NS 説: ..んで=, __
- 07 ..^そした`ら=, /
- 08 NS 被: ..うん.\
- 09 NS 説: ...(.9)えと=, __
- 10 → ... (1.0)`1 目_{地点(あ)}^2 目_{地点(あ)}のこう--

- 11 → ... (2.4) 交差点_{地点(い)}があつて=, /
 12 NS 被: ..ああ.\
 13 NS 説: (0)で突[^]き当たる_{地点(う)}やん.\
 14 ..[^]3つ目_{地点(う)}で.\
 15 NS 被: ..`はいはいはい.\
 16 NS 説: ...`そこを, /
 17 ...`左に行くん.\

(7) [JFJF5R] (母語場面)

- 01 NS 説: え=と, __
 02 ..では,\
 03 ..Aから出発します.\
 04 ..Aから=, __
 05 ..下に=, __
 06 ..降りて=, __
 07 → ..いち_{地点(あ)}に_{地点(い)}=--
 08 → ..3つ目=の, __
 09 → ..角_{地点(う)}を, __
 ((中略))
 19 NS 説: ..左に? /
 20 ..曲がってください.\
 21 → NS 被: ... (1.3) 3つ目を左? /
 22 → NS 説: .. いち_{地点(あ)}に_{地点(い)}=さん_{地点(う)}, __
 23 NS 被: ..うん.\
 24 NS 説: ..[3つ].\
 25 NS 被: [3つ]ずつ,\
 26 ..'うん.\
 27 → NS 説: ...[^]3つ目_{地点(う)}を'左に曲がってください.\
 28 → ..突き当たり_{地点(う)}になってます.\
 29 NS 被: ... (1.6) はい.\

この例 (6) (7) のような、説明者による、参照点を数え上げる形での参照点への言及は、明示的な表現ではない。しかしながらそれは、出発点Aから地点(う)に至るまでの道筋において、地点(あ)と(い)の存在を説明者が明白に捉えていることを示し、かつ、結果としてその存在を被説明者に伝える機能を果たしている。その意味では、先の例 (5) の発話 [08, 10] における「3番目の曲がり角」という表現も、例 (6) (7) よりも簡略的であるが、よく似た機能を果たしていると言える。

上記の例 (3) ~ (7) は基本的に、説明者から示された地点(あ)~地点(う)が、そのまま被説明者に受け入れられていた。しかし、当然のことながら、そのまま受け入れられない場合もある。例えば、

次の例 (8) と例 (9) である。

(8) [JFJF3R] (母語場面)

- 01 NS 説： はい.\
- 02 ..まずAから出発するんですけど=, __
- 03 NS 被： うん.\
- 04 NS 説： ..Aから, __
- 05 → ..T=字=路_{地点(う)}にぶつかるまで, __
- 06 ..まっすぐ行ってください.\
- 07 NS 説： ...(1.9)いいですか? /
- 08 → NS 被： ...(1.0) T字路と言うのは=, __
- 09 NS 説： ..[はい].\
- 10 NS 被： [その], __
- 11 ..^来て=--
- 12 ..^来た道'が=, /
- 13 ..[え=と=], __
- 14 NS 説： [あの=], __
- 15 → NS 被： ..^Tの'上の所_{地点(?)}ですか? /
- 16 NS 説： ...(0.9) T=--
- 17 ..えつと=, __
- 18 ..あの, \
- 19 → ..'もう^前に進めないところ_{地点(う)}, __
- 20 ..です.\
- 21 NS 被： ...(0.7)^なに['それ=].\
- 22 NS 説： [<@ @>]
- 23 NS 被： ..あ,
- 24 ..'前が^わかりまし]た.\
- 25 NS 説： [え%^前からあの=], __
- 26 → ..左右にしか%
- 27 → 行けないところ_{地点(う)} [です].\
- 28 NS 被： [え=と], __
- 29 ..じゃその手前に=, /
- 30 ..え=と=, __
- 31 ..右に曲がる--
- 32 ..あ最初に左に曲がる道_{地点(あ)}があつて=, __
- 33 NS 説： ..ええ.\
- 34 NS 被： (0)次に右に曲がる道_{地点(い)}があつて=,
- 35 ..[行き]止まり_{地点(う)} [です]ね? /

- 36 NS 説 : [(で--)] [はい].\
- 37 NS 被 : (0)はいわかりました.\

(9) [JM4R] (母語場面)

- 12 NS 説 : ..まず^ A ==から(入り)ます.\
- 13 NS 被 : (0)[はい].\
- 14 NS 説 : [みな]みにず=つと, __
- 15 NS 被 : ..はい.\
- 16 NS 説 : ..行きまし`て, /
- 17 ..え=, __
- 18 → ...(.9) 3 ^つ目の`曲がり角_{地点(う)}, \
- 19 → NS 被 : ... (1.1) みっ[`つ目の曲がり角], \
- 20 NS 説 : [`つ目の曲がり角]_{地点(う)}, \
- 21 → ..え=と, \
- 22 → NS 被 : (0)^突き当りのところ? _{地点(う)} /
- 23 → NS 説 : (0)^突き当り[の]ところ_{地点(う)}ですね. /
- 24 NS 被 : [はい].\
- 25 NS 説 : ..^突き当りのと`ころ_{地点(う)}を, \

例 (8) では、説明者から提示された「T字路」という表現（発話 [05]）が、被説明者には受け入れられず、発話 [08-15] で確認が行われている。これに対して説明者は、「もう^前に進めないところ」（発話 [19]）、「左右にしか..行けないところ」（発話 [26-27]）と言い換えた。しかし被説明者は、その説明者の発話が終わらないうちに自ら話順を取り、地点（あ）から地点（う）に至るまでの道筋の形状を確認し始めている（発話 [28-35]）。その結果、両者はようやく了解するに至っている（発話 [36-37]）。

また例 (9) では、説明者は地点（う）を「3つ目の曲がり角」（発話 [18]）と言及した。これに対し、被説明者がその次の発話を発するまでに 1.1 秒のポーズが生じており、この時点では被説明者は、まだ地点（う）の位置を同定していない。説明者が「え=と」（発話 [21]）という困惑を示す発話を行ったのも、それを察したためと考えられる。しかし、被説明者の方から「突き当たりのところ?」（発話 [22]）と言い換えて確認されたことにより、同地点が両者に同定されるに至っている（発話 [23-24]）。

このように、例 (8) や例 (9) では、説明者から示された地点（う）が、被説明者にはそのままの形では受け入れられなかった。しかし、被説明者による確認行為が、同参照点を別の表現に言い換える契機となっており、このような相互作用を経ることにより、より確実に参照点の伝達が達成されたことが分かる。

以上まとめると、母語場面では、地点（あ）（い）の存在を言語表現化しないまま「道順説明」が進む例も見られたが、それでも説明者と被説明者の間でトラブルは生じておらず、参照点の捉え方が不思議なほど一致していたことがわかる。ただし、地点（う）の表現に関して、そこに至るまでの地点

(あ) (い) を数え上げる方法で説明者が言及したり、確認などによって言い換えられたりする例も見られた。これらの言語表現方法や相互作用が、より確実な参照点の指標・伝達を可能にしたと考えられる。

4.2 接触場面Ⅰと接触場面Ⅱにおける参照点の言語表現

前節 4.1 では、母語場面における参照点の捉え方について検討を行った。これを踏まえて、接触場面Ⅰと接触場面Ⅱについても参照点の言語表現の検討を行いたい。

なお、接触場面の「道順説明」では母語場面とは異なり、「初期段階で道順を間違える」現象に陥って、地図上のいずれかの地点に戻り、何度か説明をやり直す事例がしばしば見られた。ここでは特に、やり直しの説明を始める以前の談話部分のみを分析対象とすることにした。

その結果が表 3 および表 4 である。被験者ペアの提示順序や、言語表現の表記方法は、表 2 の場合と同様である。

表 3 接触場面Ⅰ (NNS説明者-NS被説明者ペア) における参照点の言語表現

被験者 ペア名	課題達成 時間 (分'秒")	説明者による 地点(あ)(い)の 言語表現	説明者による 地点(う)の言語表現	被説明者による 地点(あ)～(う)に関する 確認表現	間違い現象 発生の有無
NMJM4	00'33"	無	「突き当たりのところ」	無	無
NFJF3	01'20"	無	「突き当たるところ」 「道がないところ」	無	無
NFJF1	01'33"	無	「3 番目のコーナー」 「交差点」	無	無
NFJF4	01'58"	無	「ちっちゃい建物を過ぎたら」	「ちっちゃい建物を越す んですね？」	無
NFJF5	02'16"	「右側の、ありますよ ね？道が」 「また左=の方に道が」	「左と右の道がありますよ ね？」	「(地点(あ)について) す ぐ？ はじめ」	無
NMJM5	02'36"	無	「突き当たり=のところ」 「最初じゃなくて3 番目」	「最初の角で右ですか？」	無
NFJF2	03'22"	「いちに=」 「道のあるところが3 つあるでしょ？そうい うぶつかったところ？」	「さん」 「3 番目の、あの=角のと ころ？」 「3 番目=ところ」	「Aはずつ=とまっすぐで？」 「いちに= 3 番目の、と ころ」	無
NMJM3	04'35"	無	「大きいブロックと小さい ブロックの=この、あの=と ころ」	「最初のY字路はまっす ぐ来て=」	無
NMJM2	06'33"	無	「左側があの=、右側よりち よっと、低く、しかくけい のものがあるわけですね」 「そこ=の、一番下の角」	「どっから左へ曲がる (わけ)？」	有り
NMJM1	09'37"	「まずコウサツ道路が ある」 「第1コの交差点」 「1つの交差点」	「第2番目の交差点」	「交差点が」 「3つに分かれてるよね？」 「左と右があって」 「右ってことね？」 「左に曲がらないってこ とね？」	有り

表 4 接触場面Ⅱ (NS説明者-NNS被説明者ペア) における参照点の言語表現

被験者 ペア名	課題達成 時間 (分'秒")	説明者による 地点(あ)(い)の 言語表現	説明者による 地点(う)の言語表現	被説明者による 地点(あ)～(う)に関する 確認表現	間違い現象 発生の有無
JMNM1	01'05"	「1つ目2つ目」	「3つ目」	無	無
JFNF1	01'45"	「2つT字路」	「突き当たり」	「最初の突き当たりなんですけど、1つのマス越えて突き当たりですね」	無
JMNM5	01'56"	「1つ目の角」「1つ目=の曲がり角」 「次の曲がり角」	「次の角、え=突き当たり のところ」	無	無
JFNF5	02'44"	無	「突き当たり」「突き当たる」	「左ですね？」	有り
JFNF2	02'54"	無	「3つ目の角」	「どのホウホウの角」 「初めての角のところが」	有り
JMNM2	03'11"	無	「2番目の右に曲がる角」	「2番目には右がない」	有り
JMNM3	03'32"	無	「3本目の角」	無	有り
JFNF4	04'57"	「いち、2個」	「3個目の、あの角？ あ 角じゃない、交わってると ころ」「3個目に交わって」	無	無
JFNF3	08'21"	無	「突き当たり」 「突き当たるとこ」	無	有り
JMNM4	24'03"	「1つ目の交差点」 「1つ目の角」 「(1つ目)右に曲が る道」「2つ目の角」	「3つ目」 「3つ目でちょうど角」	「3つ目？」 「最初から3つ目ですか？」	有り

母語場面を踏まえ、接触場面Ⅰ・接触場面Ⅱについて、説明者による参照点の言語表現や、被説明者による確認表現を検討してみると、次のような違いがある (cf. 表3と表4)。

- ア) 接触場面Ⅰでは、説明者 (非母語話者) による地点 (あ) (い) への言及は3例だったのに対し、被説明者 (母語話者) による地点 (あ) ～ (う) に関する確認は7例見られた。
- イ) 接触場面Ⅱでは、説明者 (母語話者) の地点 (あ) (い) への言及は5例あり、被説明者 (非母語話者) による地点 (あ) ～ (う) に関する確認も5例あった。しかし、この確認が行われた5例中4例で「初期段階で道順を間違える」現象が発生していた。

アの被説明者 (母語話者) による地点 (あ) ～ (う) に関する確認とは、例えば、次の例 (10) や (11) のようなものである。

(10) [NMJM5R] (接触場面Ⅰ)

- 01 NNS 説: はい、\
- 02 ..それではAから出発します、\
- 03 NS 被: ..はい、\

- 04 NNS 説: ...まあ, __
 05 ..突き当り=の_{地点(う)}ところまで, __
 06 ..右へ行きます. \
- 07 → NS 被: ..最初の_{地点(あ)}角で, __
 08 → ..右ですか? /
- 09 NNS 説: ...いや=, __
 10 ..え=最初_{地点(あ)}じゃなくて3番目_{地点(う)}, __
 11 ..突き当りの_{地点(う)}ところ, __
- 12 NS 被: [あ]あ突き当りの_{地点(う)}ところで=? /
- 13 NNS 説: ..ええ. \

(11) [NFJF2R] (接触場面Ⅰ)

- 05 NNS 説: ..Aから行って=, /
 06 ..まっすぐ行って=, __
 07 ..いち_{地点(あ)}に=_{地点(い)}さん_{地点(う)}, __
 08 ...(1.0) 3番目_{地点(う)}の=, __
- 09 NS 被: ..うん. \
- 10 NNS 説: ..あの=角_{地点(う)}のところ? /
 11 ..えっと=, __
 12 ..左へ, __
- 13 → NS 被: ..Aはずっ=とまっすぐで? /
- 14 NNS 説: ..そうです. \
- 15 → NS 被: いち_{地点(う)}に=_{地点(う)} [3番目_{地点(う)}の%]ところ--
 17 NNS 説: [いち_{地点(う)}に=_{地点(う)}さん_{地点(う)}]

例(10)では、説明者（非母語話者）から「突き当たり=の_{地点(う)}ところ」と_{地点(う)}が示されたが（発話 [05]）、被説明者（母語話者）は「最初の角」と言い換えて確認を行っている（発話 [07-08]）。これにより両者の認識の不一致が明らかになり、説明者が_{地点(う)}を「最初じゃなくて3番目」と言い換えたため（発話 [10]）、被説明者が_{地点(う)}を同定するに至っている（発話 [12]）。

例(11)でも、説明者（非母語話者）から_{地点(う)}が「3番目の、あの=角の_{地点(う)}ところ」と示されたが（発話 [08, 10]）、被説明者（母語話者）は「Aはずっ=とまっすぐで?」とそれまでの経路を確認し（発話 [13]）、さらに_{地点(あ)}～（_{地点(う)}）を「いちに=_{地点(う)}3番目の_{地点(う)}ところ」と数え上げる形で言及している（発話 [15]）。

このように、接触場面Ⅰでは、被説明者（母語話者）による参照点（_{地点(あ)}）～（_{地点(う)}）に関する積極的な確認例が多く見られた。このような確認行為およびその後の相互作用は、説明者（非母語話者）による説明を補う機能を果たし、結果として「初期段階で道順を間違える」現象の回避につながったと考えられる。

イ) については、接触場面Ⅱでは、被説明者（非母語話者）による_{地点(あ)}～（_{地点(う)}）に関する確認

が行われなかったり、あるいは行われていても確実ではなかったため、両者の間で参照点の認識に関する不一致が生じ、結果として「初期段階で道順を間違える」現象となって現れたと考えられる。

典型例としては、初めに見た例 (1) が該当する。くり返しになるが、例 (1) では、説明者（母語話者）から発話 [08,10] で「突き当たり」「突き当たる」と示された地点（う）について、被説明者（非母語話者）は「左ですね？」（発話 [14-16]）と進行方向に関して確認を行っていた。しかし、地点（い）と地点（う）の進行可能方向が同じであり、そこが正確に同定されなかったため、説明者・被説明者間で参照点の認識は食い違ったまま「道順説明」が進行し、結果として「初期段階で道順を間違える」現象に陥っていた。次の例 (12) も、同様の例である。

(12) [JFNF2R] (接触場面Ⅱ)

- 04 NS 説: ...Aから入って、\
- 05 NNS 被: ..はい、__
- 06 NS 説: ...え=と=、__
- 07 ... (1.1) 3つ目の角_{地点(う)}を、\
- 08 NNS 被: ..3つ目の[角]_{地点(?)}-- \
- 09 NS 説: [3]つ目の角_{地点(う)}、\
- 10 NNS 被: ...角_{地点(?)}、\
- 11 NS 説: ..角ってあの、__
- 12 → NNS 被: ..3つ目の角と、__
- 13 → ..どのホウホウの角--\
- 14 NS 説: ...え=とねえ、__
- 15 → NNS 被: ... (8) 左右、__
- 16 NS 説: ..えと、__
- 17 ..それを=、\
- 18 ..左に、__
- 19 NNS 被: ... (1.1) 左に、\
- 20 NS 説: ..うん、\

((中略))

- 119 NS 説: ...そうそう一番--__
- 120 NNS 被: ..全部外側__
- 121 ...あ[の%とっ]て=、\
- 122 NS 説: [え%ち]-
- 123 NNS 被: ...行くの? /
- 124 → NS 説: ..え、__
- 125 → ..違う違う、\
- 126 NNS 被: ..ち[がう]? /
- 127 NS 説: [えっと]、__

例(12)では、説明者(母語話者)から発話[07,09]で「3つ目の角」と示された地点(う)について、被説明者(非母語話者)は「3つ目の角と、どのハウハウの角」(発話[12-13])と質問を行っていた。続けて被説明者から発せられた「左右」という発話[15]も加味すれば、おそらく被説明者は「左と右のどちらに進む角のことか」と質問したかったのであろう。しかし、これを説明者は地点(う)での曲がるべき方向が問われたものと理解したようで、「それ(地点(う))を=, 左に」と答えている(発話[17-18])。結局、説明者から「3つ目の角」と示された地点は被説明者には曖昧なまま、被説明者は地点(い)で左に曲がり、「初期段階で道順を間違える」現象に陥ってしまう。それがコミュニケーション・トラブルとして明らかになるのは、説明者が一通り「道順説明」を終えた後となる(発話[120-126])。

以上をまとめると、接触場面Ⅰでは、説明者(非母語話者)による参照地点(あ)(い)への言及は少なかったものの、被説明者(母語話者)による積極的な確認がこれを補う機能を果たし、結果として「初期段階で道順を間違える」現象の回避につながったと考えられた。これに対して接触場面Ⅱでは、説明者(母語話者)による参照地点(あ)(い)への言及は半数のペアで行われていたが、被説明者(非母語話者)による確認も半数で、行われた場合でも多くが不確実であった。そのため、両者の間で不一致が生じ、これが「初期段階で道順を間違える」現象につながったと考えられる。すなわち、被説明者の果たした役割の違いが、「初期段階で道順を間違える」現象の発生に大きく影響したと考えられる。

5. おわりに

以上、本稿では、「道順説明」の談話のやり取りのごく早い段階で、被説明者が道順を間違える現象(「初期段階で道順を間違える」現象)が起きていることに注目し、その要因を探るべく、参照点に関する言語表現に焦点を当てて分析を行った。その結果を初めの研究目的に合わせた形で示すと、次の3点のようになる。

- a) 被説明者が日本語母語話者の場合(母語場面および接触場面Ⅰ)では、「初期段階で道順を間違える」現象の発生は少なかった。これに対し、被説明者が非日本語母語話者の場合(接触場面Ⅱ)では、同現象が多発していた。
- b-1) 母語場面では、進行方向の変更を伴わない参照点の存在が、説明者から言語表現化されないまま「道順説明」が進められる例が多く見られた。ただし、それらを数え上げる方法で言及したり、確認などの際に言い換えられたりする例も見られた。これらの言語表現方法が、より確実な参照点の指標・伝達を可能にしていたと考えられる。
- b-2) 接触場面Ⅰでは、説明者(非母語話者)による進行方向の変更を伴わない参照点の言語表現化は少なかったものの、被説明者(母語話者)による積極的な確認がこれを補っていたと考えられる。他方、接触場面Ⅱでは、被説明者(非母語話者)による確認が行われなかったり、行われても不確実な場合が多かった。そのため、両者の間で参照点の認識に関する不一致が生じ、結果として「初期段階で道順を間違える」現象が多発したと考えられる。

このように「初期段階で道順を間違える」現象の検討からは、「道順説明」の談話の中でも、説明

者と被説明者の間での参照点の捉え方を一致させることが、ごく早い段階で必要とされていることが明らかとなった。このような参照点の捉え方は、予め両者で一致している場合もあった。しかし、たとえ両者間に不一致があっても、それが早い段階で相互作用によって解消されれば、「初期段階で道順を間違える」現象、すなわちコミュニケーション・トラブルを未然に回避できていた。被説明者による確認は、まさにその相互作用の重要な契機となっていた。ここで明らかになったことは、コミュニケーション・トラブルが発生する以前の状況が重要ということであり、それはトラブル発生要因の解明という面でも大きな意義があったと考える。

なお、「初期段階で道順を間違える」現象に陥った被験者ペア（例えば例（1）、例（2）、例（12）のペア）は、その後に折衝を重ね、いずれも到着点Bまで辿り着く。両者の間でどのような相互作用を行い、またどのようにして不一致点を解消していくかは、非常に重要かつ興味深いプロセスと考える。しかし、残念ながら今回はそこまでの分析には及ばなかった。今後の課題として、稿を改めて検討したい。

《謝辞》

本稿を執筆するに当たり、熊本大学教授岡部勉先生、同大学教授牧野厚史先生、同大学教授福澤清先生、ならびに元広島大学教授大浜のい子先生に多くのご指導を頂きましたこと、ここに記して厚く感謝申し上げます。言うまでもなく、本稿の不備・誤りはすべて筆者の責任である。

《注》

- 1) ここでの「コミュニケーション・トラブル」とは、説明者と被説明者の相互作用に不都合が生じ、目的とする行為（「道順説明」）がスムーズに進められなくなる現象を言う。
- 2) 村上（1997）のいう「認知フレーム」とは、人がある言語行動を行うために、自分を取り巻く言語環境を捉える典型的な認知形態を示す枠組みのことを指す。本稿でも、その定義に従う。
- 3) この実験では、この1番目の「道順説明」（「赤の道順」）に引き続き、さらに2種の「道順説明」（「緑の道順」と「青の道順」）も課せられていた。ただし本稿では、被験者が初めて手にした実験材料の地図をどう認識して「道順説明」という行為を行うかという現象に焦点化するため、1番目の「道順説明」のみを分析対象とした。
- 4) 村上（1999）は、地点（あ）～（そ）をいずれも「方向参照地点」と呼んでいる。確かに、被説明者にとってはいずれも方向が変わる可能性を持つ地点ではある。しかし、道順を知っている説明者にとっては、例えば地点（あ）や地点（い）は、実際に方向を変える地点ではない。この点に関して、日常会話における道順説明を分析した Psathas & Kozloff（1976: 122-123）は、‘the directional reference point（方向参照地点）’と‘the orientational reference point（方向付けの参照地点）’を区別している。前者は、方向の変化が生じる地点を示す。これに対して後者は、「方向参照地点」の間において、被説明者が正しい道にいること、また依然として正しい方向に導かれていることを示す。両者は合わせて‘reference point（参照点）’と呼ばれている。以下、本稿でもこの定義に基づき、両者を合わせた意味で「参照点」という用語を用いることにする。
- 5) ただし、母語場面が発生した例は、空間参照枠をどのように定めるかという問題（紙面に向かって

左右を定めるか、移動方向に対して左右を定めるか) によるもので、これについては村上 (1997, 1999) に分析がある。空間参照枠については、Levinson (1992, 2003) を参照。

- 6) 片岡 (2008: 81) は、直示動詞「行く・来る」について、典型的に「起点」と「着点」を含意するものの、格標示(「～から」、「～まで」)を伴う場合の明示的な起点・着点の標示を「焦点化」、格標示を伴わない場合の非明示的な指標を「指標化」と区別している。本稿での「突き当たる」という動詞について詳しく検討する余裕はないが、片岡と同様の区分に基づくことにする。

《文字化記号》

主な記号のみ示す。詳しくは Du Bois *et al.* (1992, 1993) を参照のこと。

[]	発話の重なり部分	\	下降イントネーション
,	内容が後に続く	/	上昇イントネーション
.	内容の終結	^	第一アクセント
?	呼びかけ	˘	第二アクセント
...(N)	0.7秒以上のポーズの秒数	=	伸びた音
...	0.3～0.6秒のポーズ	@	笑い
..	0.2秒以下のポーズ	&	表記の便宜上改行した部分が、1つのイントネーション・ユニットとしてつながることを示す
(0)	前の発話と間がないこと		
—	平板イントネーション		

《参考文献》

- Blakar, R. M. (1973). An experimental method for inquiring into communication. *European Journal of Social Psychology*, 3, 415-425.
- Du Bois, J. W., Schuetze-Cobum, S., Cum-ming, S., and Paolino, D. (Eds.) (1992). *Santa Barbara Papers in Linguistics Vol. 4: Discourse Transcription*. Department of Linguistics University of California, Santa Barbara.
- Du Bois, J. W., Schuetze-Cobum, S., Cum-ming, S., and Paolino, D. (1993). Out-line of discourse transcription. In Ed-wards, J. A. and Lampert, M. D. (Eds.), *Talking Data*. Hillsdale: Lawrence Erl-baum Associates, Publishers. 45-89.
- 池上嘉彦 (1995). 言語の意味分析における<イメージ・スキーマ> 日本語学, 14(10), 92-98.
- 鹿嶋 (村上) 恵 (2000). 日本語母語話者と非母語話者の接触場面における談話形成プロセスの研究 平成9～11年度科学研究費補助金基盤研究(c)(2) 研究成果報告書
- 片岡邦好 (2008). 空間談話におけるメンタル・マップの協同構築: 日本人ロック・クライマーによる直示移動同時「行く／来る」の用法について 篠原和子・片岡邦好(編) ことば・空間・身体 ひつじ書房 69-100.
- Levinson, Stephen C. (1992). Primer for the field investigation of spatial description and conception. *Pragmatics* 2 (1), 5-45.
- Levinson, Stephan C. (2003). *Space in Language and Cognition: Exploration in Cognitive Diversity*. Cambridge: Cambridge University Press.

- 村上恵 (1996). 「道順説明」の構成要素と表現類型 三重大学日本語学文学, 7, 79-94 (左15-30).
- 村上恵 (1997a). 日本語母語話者間のコミュニケーション対立の解決過程: 談話構造と参加者の役割変化 広島大学日本語教育学科紀要, 7, 173-183.
- 村上恵 (1997b). 「道順説明」でのコミュニケーション・トラブルと認知フレームの対立: 日本語母語話者と非母語話者の接触場面の談話分析 三重大学日本語学文学, 8, 121-134 (左15-28).
- 村上恵 (1998). 「道順説明」における参照点機能と表現類型: 地図の図形認知に基づいた異なり 三重大学日本語学文学, 9, 105-116 (左1-12).
- 村上恵 (1999a). コミュニケーション対立の解決策と折衝 三重大学留学生センター紀要, 1, 53-65.
- 村上恵 (1999b). 「道順説明」における空間の参照フレーム: 表現形式の談話分析 三重大学日本語学文学, 10, 166-178 (左1-13).
- Psathas, George & Martin Kozloff (1976). The Structure of Directions, *Semiotica*, 17(2), 111-130.
- Psathas, George (1986a). The Organization of Directions in Interaction. *Word*, 37, 83-91.
- Psathas, George (1986b). Some Sequential Structures in Direction-giving. *Human Studies*, 9, 231-246.
- Psathas, George (1991). The Structure of Direction-giving in Interaction. In Deirdre Boden and Don H. Zimmerman (Eds.) *Talk and Social Structure: Studies in Ethnomethodology and Conversation Analysis*. Cambridge, UR: Polity Press, 195-216.
- Psathas, George (1995). *Conversation Analysis: the Study of Talk-in-interaction*, California: Sage. (北澤裕・小松栄一訳 (1998). 会話分析の手法 マルジュ社)

Examination of Expressions of Reference Points in Direction-giving: Focusing on the Early Phase of the Discourse

KASHIMA Megumi

In this paper, we conducted a task-oriented experiment with paired subjects to examine expressions of reference points in direction-giving. These subjects comprised ten pairs of native Japanese speakers, ten pairs of a non-native Japanese explainer and a native Japanese recipient, and ten pairs of a native Japanese explainer and a non-native Japanese recipient. We observed that many recipients made mistakes regarding the route in the very early phase of the discourse of direction-giving. We examined expressions of reference points to investigate this phenomenon. To this end, we used discourse analysis to reveal the following: (1) the positions and expressions of reference points that were identified by explainers and recipients and (2) the differences that existed among the paired subject groups regarding the ways of expression or the confirmation for reference points.